

関西大学英語学会第 35 回例会では下記シンポジウムを開催します。参加費は無料です。非会員の方の参加も歓迎いたします。spiralcricket@gmail.com までご一報ください。

関西大学英語学会シンポジウム「研究としての通訳翻訳」

通訳翻訳に関する興味は大学レベルで盛んになっているように思われるが、その研究としての手法はまだまだ十分に確立されているとは思われない。本シンポジウムでは、翻訳を利用した教育、英語学、通訳研究の3つの立場から通訳翻訳がどのように研究として成立し、どのような切り口が興味深い論文を産むのかについてフロアを交えて検討したい。さらに、日英の問題を日—モンゴル語の通訳翻訳の観点から見ることにより通訳翻訳一般の問題に敷衍して検討する。

日時： 2013 年 3 月 24 日 (日)14時30分～17時00分

会場： 関西大学 第一学舎 E402 教室

関西大学英語学会 第 35 回例会

13:30～13:45 総会

13:50～14:20 研究発表 「翻訳単位としての慣用句—日モ語の慣用句の翻訳を事例に一」

アシガイ・デルゲルマー (モンゴル文化教育大学)

14:30～17:00 シンポジウム「研究としての通訳翻訳」

17:45-19:45 懇親会 居酒屋すっぽん (懇親会費は一般 4000 円、学生 3000 円の予定)

シンポジスト

染谷泰正 (関西大学)「通訳研究の現状と課題」

豊倉省子 (神戸女学院非常勤講師)「英語教育における翻訳をめぐる最近の研究動向」

山口治彦 (神戸市外国語大学)「翻訳が映す社会:manga と anime から見えてくるもの」

ディスカサント **アシガイ・デルゲルマー (モンゴル文化教育大学)**

司会 **鍋島弘治朗 (関西大学)**

講師紹介

染谷泰正(関西大学) 関西大学外国語学部教授。日本における通訳翻訳研究および通訳教育理論先駆の研究者。『英文ビジネス文書完全マニュアル』など著書多数。

「通訳研究の現状と課題」

本発表では「通訳研究」という分野にあまり馴染みのない方を想定して、その歴史と現状を概観する。通例、通訳研究は「通訳翻訳研究」(Interpreting and Translation Studies)という分野に包括され、その上位分野として言語学(社会言語学や応用言語学を含む)とコミュニケーション学がある。歴史的には比較的新しい分野であり、1950年代以降、ほぼ10年から20年間隔で研究パラダイムのシフトが起こっている。50年代は「実務の時代」、60年代は「言語学の時代」、70年代に入ると主として同時通訳プロセスの解明を目標とした認知的・心理学的な取り組みが増え(「認知の時代」)、90年代に入るといわゆる "Social Turn" と呼ばれる時代に入る。ちなみに、日本で通訳に関する最初の学会が設立されたのは2000年のことである。そうした中で、通訳研究の具体的な対象も少しずつ変化(あるいは拡張)しながら現在に至っている。本発表では、これを「基礎研究」と「応用研究」という2つの観点から、それぞれどのようなテーマが扱われてきたかを概観するとともに、今後の通訳研究および通訳教育の方向性について若干の提言をしたい。

豊倉省子(文芸翻訳家、神戸女学院非常勤講師) 研究者&大学非常勤講師、そして翻訳家(ペンネームは相山夏奏)という三つの顔を持つ。関西大学博士後期課程で TILT (Translation in Language Teaching)をテーマに研究中。『マルベリーボーイズ』、『妖精の女王』など訳書多数。

「英語教育における翻訳をめぐる最近の研究動向」

外国語教育において、翻訳は百年以上もの間、正当な理由もなく冷遇されつづけてきた。だが、今、その流れに変化の兆しが見える。21世紀の到来とともに、従来の批判から一転、言語教育における翻訳が注目を集めつつある。本発表では、*Translation In Second Language Learning and Teaching* (Witte, Harden, Harden 2005) からいくつかの論文を紹介し、今、まさに大きなパラダイムシフトを迎えつつある TILT の最新の研究動向を概説するとともに、TILT の効用と意義、そして今後の展望について、発表者の見解を示す。

山口治彦(神戸市外国語大学) 神戸市外国語大学英米学科教授。語りの専門家として発話の場(コンテクスト)がことばにもたらす影響について研究。著書に『語りのレトリック』『明晰な引用、しなやかな引用』など。近年は役割語研究でも知られる。

「翻訳が映す社会:mangaとanimeから見えてくるもの」

アシガイ・デルゲルマー(Ashgai Delgermaa、モンゴル文化教育大学准教授)

モンゴル出身。国際交流基金「博士論文執筆フェローシップ」プロジェクトで筑波大学に留学。モンゴル国立教育大学から言語学の博士号を取得。慣用句を中心に日本語とモンゴル語の翻訳について理論的に研究。現在、モンゴル文化教育大学で日本語を教える。

研究発表「翻訳単位としての慣用句—日モ語の慣用句の翻訳を事例に—」

(この発表はシンポジウムに先立って13:50~14:20に行われます)